NO.114

美振 BISHIN

NPO法人 長崎市美術振興会
http://nagasakibishin.web.fc2.com/
〒850-0921 長崎市松が枝町2-35 2F
TEL/FAX 095-825-8295
令和2年4月1日発行

「深秋の里山」

吉田　春鈴

山歩きが大好きな私は、久しぶりに登った小高い山で、実も葉も美しい秋色に染まった「山照」の木に出合い暫く足を止めて、自然の美を満喫し、この心地よさに時のたつのも忘れ、家路に着きました。

雪舟の足跡を訪ねて

ウエダ清人

爽やかな秋風が吹く十一月中旬、大分県豊後大野市を訪ねた。ここは現在日本ジオパークのひとつに認定されている。大地の営みが生んだダイナミックな景観と「大地に祈り、共に生きる」という人の想いが感じられる。

山々の緑、そこを流れる清流は、人々の心を和ませている。大分県には数々の素晴らしい滝があるが、今回訪れた「沈堕の滝」は雪舟（1420～室町時代に活躍した水墨画家）が愛し描いたことでよく知られている。この滝は、幅100m、落差20mの美しい姿で人々を魅了している。水墨画、水彩画、写真などそれぞれの表現に最適の光景である。この場所に腰を据えてスケッチしていると、滝の音、山鳥の声が心に響き、時が経つのを忘れてしまった。また近くには磨崖仏や石橋などが多くみられ、自然景観と人々の営みを大事にしていることがよく分かる。

この旅をとおして、私たちは先人たちがつくり残した文化遺産を守り、後世の人々に伝えていくことが大切だと思った。

2020年第17回定期総会

【日 時】令和2年4月26日（日）10：00～12：00

【会 場】ホテルセントヒル長崎 3F 紫陽花の間

NPO法人　長崎市美術振興会　第17回定期総会

【日　時】 令和2年4月26日(日)10:00～12:00
【場　所】 ホテルセントヒル長崎3F　紫陽花の間
長崎市筑後町4-10　TEL　095-822-2251
【懇親会】 1F出島の間　<時間:12:30～　会費3,500円>

当会の第17回定期総会を上記のとおり開催いたします。
ご多忙中恐縮ではございますが、ご出席賜りますようにご案内申し上げます。
なお、出欠のハガキを同封しておりますので4/10(金)までにご返送ください。総会成立には定足数の規定がありますので、欠席のかたも委任状にご署名・捺印の上必ずご返信ください。

「議事」
○第一号議案
平成31年度の事業報告並びに決算報告
○第二号議案
新年度役員選出
○第三号議案
令和2年度の事業計画並びに予算案について

総会開催にあたって

理事長　笹田　末人

昨年度はラグビーワールドカップが日本中に大きな影響を与えたことは、皆さんもご存じだと思います。このことは、世界中でも話題となりました。しかし、この波は、現在もなお続いており、ラグビー観戦のチケットはほぼ完売となり人気は継続しているようです。今までずっと厳しい状況の中で維持し継続してきたからこそ今現在があるのです。美術団体も今まさに氷河期へと突入していてどこも厳しい状況が続いています。若者から年配の方までをも虜にしたラグビーワールドカップを参考にして美術振興会も奮起していきたいと思っております。

今年度は美術館で日展や大きな展覧会がいくつも予定されており、アートフェスティバル開催ができない状況が出てきました。しかし、会員の唯一の展覧会ですので美術館に三役で申し入れを行い例外ではありますが2日間のアートフェスティバルを開催できるようになりました。理事会でも会議し、中止か開催か悩んだ末、たった2日間ではありますが開催する運びとなりました。他の美術団体も多く断られている中での貴重な2日間の展覧会です。是非皆さんに参加していただきアートフェスティバルを盛り上げていってアピールしていただきたいと思っております。このまれにない展覧会がラグビーワールドカップのように話題となり美術館使用の現状を皆さんがもっと関心を持って考えるようになってくれればと考えています。　今年だけの事だと美術館の方は言いますが、やはり展示会場や音楽ホール劇場など芸術に関する建物が非常に不足しているのは間違いありません。ですから行政の方々に是非私たち人間に必要な情操教育のための場の充実をもっと考慮して戴きたいと強く願っています。旧県庁跡地のホール建設も微妙になってきましたので今後の県や市で建てる建物は小さくても芸術文化活動のできる場所を完備してほしいものですね。もちろん独立した市立美術館があれば一番いいのですが。デパートに美術ギャラリーがあるように自然と日常に芸術に触れることができる空間を持った場所がいろんな建物の中にできれば喜ばしいことです。現在県民のための県民ギャラリーが県民のために、使用しにくい状況となっていることは、誠に残念なことであります。

第68回長崎市民美術展は前期11/21～11/29後期12/1～12/8まで長崎県美術館で開催されました。

第68回市民美術展 市長賞おめでとう！

市長賞を頂けて大変嬉しく思っております。と共に写真を趣味にしていて良かったとつくづく感じています。
今後も楽しく撮って行きたいと思っております。

写真「よろこびの春」水本恵子

緑色の葉に黄色の花が映えて、元気をもらい描いた「つわぶき」。もっと研鑽を深め美しい墨色で描けるようになりたいです。

水墨画「つわぶき」雑賀加代

当時スケッチ取材等で幾度か吉野ヶ里を訪ね昔人の知恵が積る圧倒的な藁屋に魅了され今回の作品になりました。

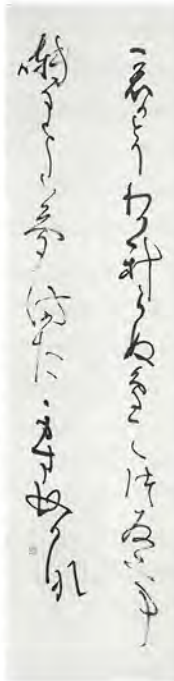
日本画「臺の郷」里令子

ドラマーの生命感溢れる想いを二次元の世界へ表現した。市長賞受賞の報告を亡くなる直前の父へ伝えられた。［合掌］

デザイン＆クリエイティブ
「Ｒｏｃｋ」江口美代子

市長賞の受賞を聞き、驚きとともに喜びが、あふれてきました。身の引き締まる思いと、自己研鑽をして精進していかなければとおもいました。

南画「春暉暁艶」小坂三枝子



私にとって書は、墨の香りに癒され心穏やかにしてくれるものです。これからも魅力ある文字や線の表現を目指します。

書「鳥」中尾智子

母なる大地から生命が誕生する瞬間を捉え生命の連続性を曲線で表し未来に羽ばたくようにとの願いを込めて表現した。

工芸「生命誕生」尾花千代香

この度の受賞を受け、20年以上前の恩師との思い出を振り返り、感謝の気持ちを深める事が出来ました。有難うございました。

洋画「海辺のバスケットコート」藤江陽子

〈写真〉伊藤重春・小中恵子

山本森之助が描いた日本の山の風景

2019年9月10日（火）～11月10日（日）まで
長崎県美術館常設展示室にて開催されました。

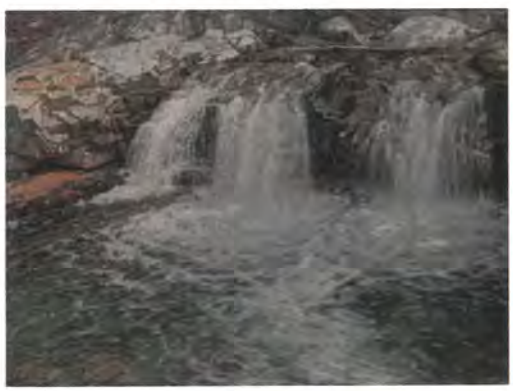
明治10年（1877）長崎市の老舗料亭「一力」の長男として生まれ、18歳で上京、東京美術学校で黒田清輝に学び、白馬会を舞台に外光派の１人として、明治から昭和初期にかけて活躍した長崎出身の山本森之助（1877～1928）が得意とした日本の山の風景画が特集されました。

《桧原湖》1918年頃

日本において自然をかいた油絵作品は明治初期より存在しましたが、それらは江戸期の浮世絵によく見られた名所絵に倣ったものにすぎませんでした。自然を画家自身の感性によってとらえ自らの感興とともに絵画に昇華させるという近代的な風景画は、明治中期になってから成立したものでした。「風景」という言葉が美術の世界において最初に現れるのが明治２０年代であったことは、その証左といえるでしょう。工部美術学校で教鞭をとったアントニオ・フォンタネージをはじめとする外国人の影響を受けながら日本における風景画は明治という時代のなかで醸成されていったのでした。

《残雪（日本アルプス）》1911年

近代の眼差しによって日本の自然美が再発見されたことで画家たちは競うようにして日本の山岳風景を描くようになります。山本ら白馬会若手画家たちも東北から九州に至る日本各地を旅してまわり、その美しい風景を次々にカンヴァスにおさめました。
屋外にイーゼルを立てて、実際の風景を前にし、刻一刻と変化する自然美を山本は生涯をかけて追求しました。



《瀧》1914年

―美術往来―

写真の原点はどこにあるか
―アートフェスタ写真部展から―

濱田　孝之

表記の写真部展がなかなか盛況である。２・３ｍの特設枠に応募される方が増えている。そこには組写真や数枚のシリーズ物が出展される。単写真よりも作家の個性や主張が読み取りやすい利点がある。これに県展の重鎮達がこぞって出展されているのが嬉しい。近年の傾向として、いまや中堅になろうかという方々が、超個性的な作品を展示して話題を呼んでいる。第１６・１７回展から、２名の作品を俎上にのせて、改めて写真のことを考えてみたい。

一人目は向井万里子さん。写歴８年目。第１６回展の「蓮物語」が好評だった。今回も花の写真で、淡い幻想的な花の色が印象に残った。彼女は、現実の花の色を反対色にするほどのテクニシャンだ。だから、題名は「心の色」なるほどと納得した。ただ、ＰＣソフトでの加工は、その辺で留めて欲しい、とも思った。

写真の語義は、文字通りに真実を写すもの。現実感から遠ざかるほど違和感が出てくる。原画を容易に加工できるデジタル技術は便利ではあるが、限界を考えブレーキを踏みながら使いたいものだ。実は私自身が２００６年に本展に出した写真？がある。（添付の作品）すぐに洋画の方から「これは写真じゃない！デザインでしょ。」と大声で指摘された。その通り元は写真でもデジタルアートに変身した。加工の限界を超えた悪い例だ。

二人目は阿部礼三君、写歴１０年、６０歳。欧州での街角風景や女性像が被写体、レトロ感が漂い心地よい湿りがある。和紙にプリントしていることも新しい。これも私を魅了した。彼はモノクロのフィルム写真に着目している。なんと！ユージンスミスの写真集を持ち、ハービー山口に心酔している。これは驚きだ。

世はデジカメ時代で後戻りすることはない。だが、彼のようにフィルム時代を知り、その作品に目で触れることは大事なことだと思う。写真の原点を悟り、その神髄を発見することになるから。写真における温故知新はここにある。

「ブルーライト・ヨコハマ」

事業部

○第17回小品展 開催会

中止

9日（日）
：00まで）
13）

南画部

○南画部活動報告
（H31年度）
9月・12月・１月　南画部委員会
2/18～2/23　第31回南画部展

○R2年度事業計画
5/16　南画部委員会

工芸部

○工芸部活動報告
友禅型染を楽しむ
　昨年9月19日、美振ギャラリーで行われた研修会は、松尾直美講師の指導のもと12名が参加して行いました。トートバックに、もみじ・ぶどうの型に色をのせて染めました。参加者の皆様に楽しんで頂きました。

洋画部

○平成31年度活動報告
□洋画部展2020
　洋画部員他一般参加による小作品展
　日時：令和2年２月11日（火）～16日（日）
　場所：長崎県美術館県民ギャラリーＢ室

○令和2年度事業計画
□デッサン会　会員、一般参加者によるデッサン講習会
日時：令和2年７月上旬 場所：未定

□洋画部展2021
日時：令和3年2月16日～21日
場所：長崎県美術館県民ギャラリーＡ室

日本画部

○日本画部会研修会報告
日　時　令和元年10月31日13：30～15：30
場　所　長崎市民会館2Ｆ第6研修室
参加者　18名うち洋画部1名
　村田和子先生を講師として「現代日本画の表現方法について」をテーマに研修会を開催「画面構成と色の配置」が中心となった。前もってＤＶＤを作成しており、プロジェクターで投影しながら講義が進められた。「奥村土牛・山口蓬春」両大家の作品を解説、日本画の原点に触れた。次に新進気鋭の宮下真理子氏の線が美しく、色数は少ないが強弱ある簡素化された色使いを解説された。ご自身の絵に対する向かい方として「うまい絵は描かなくて、いい絵を描く。悩まないで突き進んでいく。遠慮しないで開き直り、ワクワクドキドキの中で心象表現を大切にし、絵に物語を紡いでいくとよい」と語られたことが大変印象に残った。自己紹介、お茶の時間、おしゃべりのひと時で、賑やかに交流を深め、多くを学ぶことができた。あっという間の2時間でした。

写真部

写真教室今回も大好評でした!
　昨年に引き続き市展会期中に写真家・池田勉先生を講師に写真教室を開催、６０人の大勢の写真愛好家の皆様にご出席頂きました。
　講評用の作品も５１点のご出品を頂きました。
　写真教室の内容は、池田勉先生が長年ライフワークとして取り組んでおられる「托鉢寒行を追って！」をテーマに７０分ご講演を頂き、その後、ご出品頂いた５１点の作品について、講評を頂きました。
　出席者からは、「いい勉強になった」、「写真の考え方が良く理解出来た」等々の感想を頂きました。
　ご参加頂きました皆様、講師の池田勉先生有難うございました。

クリスチャン・ボルタンスキー — Lifetime

2019年10月18日（金）～2020年1月5日（日）まで長崎県美術館企画展示室で開催されました。

《アニミタス（チリ）》2014 / ビデオプロジェクション（HD、13時間16秒）、干草、苔、花 / 作家蔵
© Christian Boltanski / ADAGP, Paris, 2019, Photo by Amparo Irarrázaval

本展は世界的に活躍するフランス人アーティスト、クリスチャン・ボルタンスキーの半世紀にわたる活動の全貌を紹介する回顧展です。初期のオブジェから彼の代名詞ともなったモニュメントシリーズ、そして最新作の映像インスタレーションに至るまで様々な素材や表現手法による数々の作品が展示されました。

ボルタンスキーの作品は初期から最新作に至るまで一貫して個人的・集団的な記憶や生、不在、死などを扱っています。彼が用いる写真、電球、古着、心臓音、風鈴といった素材は無数の人々の生きた痕跡であり、不在の隠喩法であり彼らにまつわる記憶を（時には忘却の事実を）召喚するためのささやかな仕掛けでもあるといえるでしょう。芸術家の役割は「死者に捧げる儀式を行うこと」と語るボルタンスキーは、作品を通して人は誰もがかけがえのない存在であること、同時にとても儚い存在であることを語り続けています。

《ぼた山》 2015 / 衣類、円錐形の構造物、ランプ / 作家蔵
©Christian Boltanski / ADAGP, Paris, 2019, ©MACs_Grand Hornu, Belgique, Photo by Philippe De Gobert

自らを「空間のアーティスト」と呼ぶボルタンスキーの「展覧会をひとつの作品として見せる」という意向に従いそれぞれの展示会場が独立したひとつの作品となります。明滅する光や心と体を揺さぶる音響などを重要な構成要素としています。これらの作品は見るというよりも五感で体感するものとなり訪れる私たちを記憶、生、死などをめぐるエモーショナルな旅に導いてくれることでしょう。

1944年、パリに生まれる。独学で作品制作を始め、1960年代後半から映像作品を制作し始める。この頃よりドクメンタやヴェネツィア・ビエンナーレを始めとする国際展に参加。1985年に子供の写真を電球で構成されたモニュメントシリーズの制作を始める。2000年以降は、声、音、光の効果を組み合わせた演劇的なインスタレーションを制作し、近年は映像インスタレーションも手掛けるがその作品は一貫して歴史、記憶、生、死の問題を扱っている。

《モニュメント》1986 / 写真、フレーム、ソケット、電球、電気コード / 作家蔵
© Christian Boltanski / ADAGP, Paris, 2019, Photo © The Israel Museum, Jerusalem by Elie Posner

《黄昏》2015 / ソケット、電球、電気コード / 作家蔵
© Christian Boltanski / ADAGP, Paris, 2019, © Oude Kerk, Amsterdam, Photo by Gert Jan Van Rooij

（以上、文章は展覧会のチラシを元に作成しました）

カーテンを抜け誘われるように会場に入るとまず飛び込んでくるのは心音。とっく、とっく、とくっと心臓の鼓動の音が聞こえてくる。それは会場を巡る間ずっと鳴り続いている。これは何を意味するのか？不思議な気持ち・感覚にとらわれながら会場を一巡りしました。